十字架の愛に立ち返り、
教会を建て上げる

エフェソ2章11～22節
2022年9月18日
松田 基子 師

人間は、自分の命の与え主である神様に対して、神様の愛の御心に従うよりも、自分の考えを正しいとして神様との関係を切り、自分が一番とする、自己中心の考え方を選びました。
その様にして、真の愛と聖さ、正しさの根源であられる神様から離れた人間は、自己中心を助長する、神様に敵対する勢力と手を結んでしまいました。 悪の勢力と手を結んだ結果は、悪の勢力と運命を共にすることになりました。 その行く先は永遠の滅びです。

創造主である神様は、永遠の滅びに向かう人類をお見捨てになる事が出来ませんでした。
そして、罪無き神の御子を、人類の罪を身代わりとなって贖う救い主メシアとしてこの世に誕生させる事を御計画になりました。 しかし、当の人間は、自己中心の判断しか出来なくなっており、自分の罪に気付いていません。神様はかけがえのない御子を贖い主として歴史の中に送ろうとしておられるのに、人間は自分の罪も、贖い主の価値も分からないでいます。神様はどうなさったでしょうか。 神様は、神の御子、救い主メシアの誕生に向けて、神様に聞き従ったアブラハムの子孫、イスラエルを選ばれましたが、彼らはエジプトの奴隷の身となりました。それは悪の勢力の奴隷となっている人間の真の姿でもありました。 神様は救いを求めて叫ぶイスラエルを、モーセを指導者に立てて、出エジプトを果たさせ、シナイの荒野に導かれました。

そこで神様が、先ず与えられたものは律法でした。 それはその時代のイスラエルが、神様の命令に聞き従って、幸いを得る為のものでした。
神様以外に何も頼れるものが無い荒れ野で、神様に聞き従ったならば、
『必ず真の幸せに導かれる』
と言う事を体験させ、神様に全信頼する為の訓練でした。 神様は罪が分からないイスラエルに、律法を与えて罪を教えられました。 律法が与えられたのは、人をそれで計る為ではなくて、
『律法を完全に守る事が出来ない**自分の罪に気付いて**、神様の前に人間が如何に罪深いか、真に**自分の罪に悩ませ**るためであり、そして、**神様の救いを**心から**求めさせる**ため』
でありました。

自分の罪の借金の大きさが分からなくて、どうして神様の救いの偉大さが分かるでしょうか。
神様はその事を、また神様を礼拝する方法の中でも教えられました。 古代において、年に一度、大祭司は、自分と全国民の罪を抱えて、神様からの赦しを求めるために、命の徴(しるし)である犠牲獣の血を携えて、至聖所に入りました。 そこには契約の箱が置かれていました。 契約の箱の蓋は贖いの場と呼ばれました。 大祭司は、そこに犠牲獣の血を注ぎました。 この事を通して、
『**罪の赦し**は、命の徴である**血を流さなければならない**』
事が教えられました。

神様はイスラエルに、律法を与え、千二百年以上をかけて、神の御子イエス様を**人類の罪の贖い主**として、この**世に誕生**させられました。
イエス様は、**神様の御心**を、神の国の教えとして**語られました**。 律法社会から、価値が無いと排除された人々に、**神様は全ての人**を**愛して**おられることを教え、その**愛を示され**ました。 病人を癒し、奇跡を行い、罪の赦しの宣言を与えられました。 しかしそれは神様の律法さえも、自己中心、人間中心で考え、生きていた宗教指導者たちにとって、彼らが考える正しさからは、**神様を冒涜**し、**律法を守らない**不届き者、**危険人物**に映りました。

そうして、彼らはイエス様を十字架に付けたのでした。 しかし、イエス様が正しい方であり、

真の救い主メシアであることは、十字架の死から**三日目に復活**されたことで、**神様が証明され**ました。 弟子達はイエス様が復活され、四十日にわたって、神の国について教えられ、その後聖霊が下って来られたことによって、イエス様こそ旧約聖書を通してイスラエルの長い歴史に約束されて来た真の救い主であることを確信しました。そして、**真の救い主は**、この世を力で治める様な救い主ではなく、**罪の贖い主**であることに心の目が開かれ、イエス・キリストによる救いを同胞イスラエルに伝えました。

ところで神様の御心は、テモテⅠの2章4節に記されていますように、

「神は、すべての人々が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。」

しかし、イスラエル人は長い歴史の中で律法主義に陥り、選民意識が強く、異邦人に対して、神様の祝福を分かち合おうとはしませんでした。イスラエル本国にいたキリスト者達も、その考えから、抜け出ることはとても困難な事でした。ところが、パウロを初め、地中海世界で生活したイスラエル人は、イエス・キリストを信じると、地中海世界の異邦人にも積極的に伝道し、異邦人をイエス・キリストの救いに導きました。 小アジア地方にもエフェソを中心に教会が出来ました。エフェソはエーゲ海に通じる一大港湾都市で、ヨーロッパとの物流の拠点として貿易で栄え潤っていました。 そこにはまた、豊穣の女神アルテミスの大神殿がそびえていました。アルテミス信仰が盛んに行われていました。同時に皇帝礼拝も行われ、イスラエル人から見れば、異教色一色の大都市でした。

パウロはそこで、三年間伝道をし、多くの人々がイエス・キリストを信じました。 エフェソの信徒への手紙1章1節には、

「神の御心によって、キリスト・イエスの使徒とされたパウロから、エフェソにいる聖なる者たち、キリスト・イエスを信ずる人たちへ」

と記されています。 手紙はパウロが差し出し人になっていますが、3章の1節、4章の1節、6章の20節から、彼はこの時、獄中に囚われの身で、獄中からこの手紙を書いている事が分かります。この手紙は、エフェソ教会だけでなく、近隣の小アジアの諸教会へも回覧するために書かれたと言われています。

イエス・キリストを信じた異邦人キリスト者は、成熟を目指していましたが、異教社会でもあり、当時の地中海世界は、哲学的論考が好きな土壌でありました。 その事から、擬似キリスト教の教えが広がっていました。 パウロはそこに危険を感じて、福音の原点に立ち返らせ、真理の道を堅持する事を勧めたのが、この手紙です。キリスト者として、教会員として、どの様な生き方をすべきかが記されています。

その中で、今朝の2章11節から22節までは、キリスト者としての根本的なあり方を勧めています。 常に基本に立ち返る、それは信仰継続、成長の基礎です。 パウロにとって、キリストの救いに与るという事は、驚くべき恵でした。 イスラエル人以外の、異邦人と呼ばれる人々は、真の神様を知る機会もなく、この世の勢力に支配されて、肉の欲望の赴くままに行動し、過ちと罪を犯し続けていました。 つまり生まれながら神の怒りを受けるべき者でした。 それにもかかわらず神様はキリストの贖いの故に、一方的な恵により、異邦人をも御救いに招き、キリストの御救いをお与えになりました。

神様の憐れみ、イエス・キリストの愛は何と測りがたく大きいものでしょうか。しかし、その恵になれたり、忘れたりする時に、信仰も自己中心的になって行きます。 パウロはそこで、エフェソの信徒さん達に11節で、

『神様の憐れみ、キリストの愛を忘れることがないように、自分達が以前置かれた状態、福音に触れる前の状態を心に留めて置きなさい』

と勧めています。

ところで、歴史を振り返ると、神様に選ばれた

イスラエルは、神様の正しい道に従うようにと律法が与えられ、神の民のしるしとして割礼を受けました。 その彼らからすれば、非イスラエル人は異邦人であり、割礼の無いもの、つまり、神の民ではないと考えられていました。 神の民でないと言うことは、12節に記されていますように、

「**キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました**」

と言うことです。 詳訳聖書によりますと、

「**民族としてのイスラエルが所有していた色々の権利から完全に遠ざけられ、追放され、メシアに関する約束に関わる色々な聖なる契約に、少しも与る事のない、神の色々な協約、神の諸契約について、何の知識も権利もない他国人であって、また、**

『あなた方は何の望みも、約束も持たず、神無しでこの世に生きていた』

と言う事を思い出しなさい」

と訳されています。 その様な絶望的存在であった事を忘れてはならないのです。

旧約聖書のイザヤ書、51章1節には、

「**あなたたちが切り出されて来た元の岩、掘り出された岩穴に目を注げ**」

と命じられています。 そのような救いようのないところから、神様の憐み、イエス様の一方的な愛によって状況は今や一変したのです。 そのことについて、 エフェソ13節に、

「**しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです**」

と言っています。 人間は自己中心で神様から離れたことによって、人間同志もイスラエル人と異邦人と言う様に、垣根を作って、遠く離れてしまいました。 自己中心と言う罪は、互いを遠ざけることはあっても、近づけることはありません。 互いに分かり合おうとはしません。 相手を愛せない、それが罪です。 人間は罪がある限り相手を心から愛することは出来ません。

イエス様はその様に、イスラエル人の心にも、異邦人の心にも、全ての人間の心に巣くう他者を愛することの出来ない罪を、御自身が引き受けて、その罪を贖う血を流して、両者を近い者以上になさったのです。 14節から16節は、 キリスト告白の一文とされています。

14節には、

「**実に、キリストはわたしたちの平和であります**」

と記されています。 人類の歴史が始まって依頼、人間は争い続け、戦い続けています。

人類は21世紀の時代になってからも、平和の必要を切実に訴えながら、いよいよ相手を信じることが出来ないで、自己防衛に走り、争い続けています。 この現実は人間の罪が愈々(いよいよ)深くなっていて、人類への危機が増大する事を表しています。 何故人間は**平和を願い、口にしながら、平和が実現しない**のでしょうか。 それは皆、**自分の為、自国のため**の平和、**自己中心**の**平和を願っている**からでしょう。

聖書は真の平和について、2章14節で、

「**実に、キリストはわたしたちの平和であります**」

と宣言しています。 詳訳聖書によりますと、

「**何故なら彼は、私達の平和、私達の一致と調和の絆であるからです。 彼は私達ユダヤ人と異邦人の両者を一つの体にして、私達の間を隔てる壁である敵意を取り壊し、破壊し、撤去されたのです**」

と訳されています。

何故争いが起こるのでしょうか。 それは互いが、**自分を正しい**として、それを認めないことに対する**恨み**や**憎しみ**、互いの**心と心のぶつかり合い**から**敵意を抱く**のです。 敵意は相手を倒すまで収まりません。 ですから、争いはどんどん大きくなって行くのです。 相手の存在を抹殺する、人間にその権限は与えられておらず、これ程大きな罪はありません。 イエス様はその人間が、互いに投げ合う敵意を十字架の上で一身に引き受けて下さいました。 15節を詳訳

聖書によりますと、

「彼は十字架につけられた御自身の肉において、色々の規定と戒めをもった、律法に原因している敵意を取り除いて下さった。それを消滅させて下さった」

とあります。

イスラエル人の**選民意識**は、律法を**自分達の特権だ**と受け取り、異邦人を排除して、神殿の中にも、一定の区域を制限して「**ここからは異邦人は入ってはならない**」との柵を設けました。彼らはその様に、**見える柵ばかりでなく**、心に**壁を作って異邦人を軽蔑し排除**しました。 その心から互いの敵意が生まれていました。 イエス様の十字架にその敵意が吸い取られた事によって、イスラエル人自身の身勝手な、この様な律法解釈は、無力なものとなりました。

「こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」

とあります。

イエス様によって双方の敵意が十字架に吸い取られたことによって、互いは和解する事が出来ました。 それはただ、和解しただけでなく、一人の新しい人、つまりキリストに繋がるキリスト者にして下さいました。 そして、イエス様の十字架は人と人との和解以上の神様との和解に導かれました。 自己中心に生きた人間は、神様にまで敵意をいだき、深い罪を犯して来たのです。神様の怒りを受けて、永遠に滅ぼされても当然の者でした。 それなのにイエス・キリストの**十字架の贖いによって**イスラエル人も異邦人も罪赦されたばかりか、**聖霊によって神様に近づく事が赦される身となった**のです。 ここに**神の家族**としての教会ができました。

20節に、

「そのかなめ石はイエス・キリスト御自身であり、キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し（聖書協会共同訳では、拡張し、となっています）、主における聖なる神殿となります。 キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです」

と勧められています。 神様が住まわれる所に命があります。 教会は平和の主であるイエス・キリストを頭とし、信徒一人一人を主に繋がるに相応しく育てて、主の真理と愛を築かれる聖霊が働かれる所、聖なる神殿です。これが教会共同体の真の姿です。

神様の憐み、キリストの愛はこのように測りがたいものであるにも拘らず、私達の現実は、なお、自己中心の罪を抱えているものです。 イエス・キリストの十字架は既に贖いが成し遂げられています。 私達は自分の心の内に敵意が湧き上がって来る度に、イエス様の十字架の前に平伏し、敵意を十字架に吸い取って頂き、罪を赦して頂き、互いに愛し合い、主の神殿である教会の一つの石として教会を建て上げて行くことが出来るように、聖霊の助けを求めて行こうではありませんか。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神様

私達は御自身に背き、御怒りの元にあったにも拘わらず、神様の憐れみと、イエス・キリストの十字架の血による贖いによって、御救いに入れられたことを、心から感謝します。

私達は常に、自分の**切り出された岩**、**掘り出された穴**を**忘れる事なく**、イエス様の**十字架の贖いの尊さを心に留め**、その御**愛に答え**て、共に**主の教会を建て上げて行く者**とならせてください。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りをいたします。

アーメン。